

「メーデー事件」前後(回想三〇年：法政大学日本文学科の歩み)

| | |
|-----|---|
| 著者 | 阪下 圭八 |
| 雑誌名 | 日本文學誌要 |
| 巻 | 11 |
| ページ | 87-89 |
| 発行年 | 1965-03-23 |
| URL | http://hdl.handle.net/10114/00019110 |

してくださるのは、近世初期の板本が多く、いずれも活字に翻刻されてないものばかりだった。

そのころ、久しぶりに研究室に集まったとき、誰かが国歌大観を見ようとして、それがなくなっているのに気がついた。たしか先生もおられたようである。あわてて調べてみると、明治編年史や日本文学大辞典も、箱だけあって中味が抜きとられていた。これは一大事、と相談して、学生が交替に研究室に泊り込むことになった。ところが女子学生を除くと、――結局明石君がほとんど一人で連日泊らなければならぬ、というわけで、まもなく空襲もはげしくなってきたこともあって、研究室の蔵書をみんなが預かる形で疎開することにした。偶然自宅を焼かれなかった人の預かった分だけが助かった。

敗戦まぎわに、官憲の黒い手が突如として近藤先生を拉し去った。その前後のことは庭山さんが書いておられるようだし、ぼくに与えられた紙数もこえたので、中途はんばだがこのへんで打ち切らせていただくことにする。

（法政大学文学部講師）

「メーデー事件」前後

阪下圭八

（昭和二八年三月卒）

一九五二年五月一日、皇居前広場（当時は「人民広場」というよび方がむしろふつうであった）で、いわゆる「血のメーデー事件」がおこった。その日の午後、夕刻ちかくまで広場に入った数万の労働者・市民・学生と数千の武装警官との間に激突がくり返され、一名の労働者と一名の学生が死亡し、双方からおそらく二千に達する重軽傷者を出した事件である。私は当時法政日本文学科の学生であったわけで、やはり数万のなかのひとりとして広場に入っている。もともと、私などは、青黒く光る鉄兜の突撃にたじたりと、敵にうしろをみせたところをしたたかに警棒でどやしつけられ、いくじなく地べたにつっぶした方のひとりにすぎないのだが、ともかく「事件」にたちあつた者として、その前後の模様など記してみたい。

メーデーの数日前、日本文学科の学生はクラス会を開いて、メーデー参加を決議したはずである。学生のメーデー参加ということは必ずしも自明のことではないが、折から講和条約の発効を機会に上提されようとしていた「破壊活動防止法」（破防法―これは占領体制に代る抑圧法として企図された）を阻むために学生もまた広汎な民主勢力の一翼たるべきだと私たちは考えていたし、メーデーこそはその大きな力の結集と示威の機会にほかならなかったからだ。こうして五月一日には、すくなくとも三〇名以上の日文科生が神宮外苑へ赴き、デモ行進に加わり、そしてあの広場へ入ったのである。（当時の日本文学科生数は三四年あわせて七〇名前後。なお、このときは法政全体で一五〇名ぐらいの学生が参加したとおもう。）

ところで、私たちは何故広場へ入らねばならなかったか。戦後の数年間、東京のメーデーはこの「人民広場」で行われてきた。メーデーという首都最大の行事の会場としては、その規模や交通の便やさらにここが天皇制国家の額ぶちにおさめられた「聖域」であったという点から、この広場こそがもっともふさわしいといわねばならないだろう。しかし、

五二年さかのぼる数年前から広場の使用が、「公園内（筆者注「広場」は天皇家の私物ではなく「国民公園」となっており、厚生省の管轄下にある）の施設、風致を損ずる懸れがある」といった理由にならぬ理由をもつて、市営されていた。しかも、この年の四月二八日、つまり「事件」の数日前、東京地方裁判所において不許可措置は憲法に保証された「集会の自由」を犯すものだという裁定が出されていたにもかかわらず、メーデーを広場からしめ出す政府の方針は変らなかつたのである。

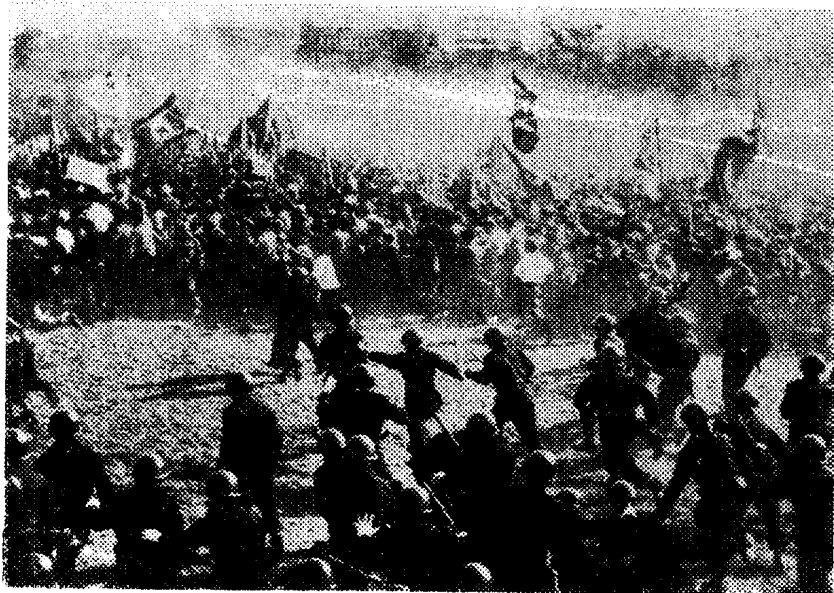
六〇万の大衆にふくれあがった神宮外苑では、各処に「人民広場へよう」の声があがっていた。安保とだきあわせの講和ではあったが、形式的にでも占領から解放されたことが人々の心を鼓舞していたにちがいない。外苑の入口ちかくで、とても高く高いのぼりをたてて「アカハタ」の復刊を告げているのが、私にはとりわけ印象的だった。一九四九年のマッカーサー指令らしい禁圧されていた共産党機関紙が、五月の空のもとに、公然と姿をあらわしたことは、この祝日にふさわしい出来事と思われた。

こうした経緯と背景のもとに、「広場」へ

の行動が開始された。それは、当日のデモ行進の中部コースに属する人々によって、終結点の日比谷公園からそのままの隊伍をとってくりだされた。「広場」における数万名の秩序はほとんど整然としたものであり、「事件」後新聞が書きたてたような「暴徒」に類する行為は全くなかつた。なぜなら「広場」に入ること、それ自体が、悪法をふりかざして自ら憲法をふみにじろうとする政府に対しての鮮明な抗議の表現であつたからだ。しかし、官憲はこの「集会の自由」の権利回復行為に、四十数発の催涙弾と七十数発の拳銃射撃と（以上の数字は警察側の発表による）おびただしい棍棒の乱打をもって挑んできたのである。数方とはいえ丸腰にすぎない。数次の襲撃は人々を追いつめ、傷つけ、殺し、そして瀕死にした。このとき、ひとりの労働者は背から胸を射ぬかれて倒れ、ひとりの学生は、法政大学哲学科三年在学の近藤巨士は殴打による頭部内出血のために（さらにその夜重傷の枕もとで強行された捕吏の質問のために）命を失わねばならなかつた。

一九五二・五・一いい「人民広場」は「皇居前広場」となつたのである。いまそこ

へゆけば、刈りこまれた芝生があり、霜よけを施された松の枝ぶりがあり、観光客をひきつけたバスガイドの白い手袋は二重橋や楠公の銅像を指していることだろう。だが私にとってそれはそぞろしい光景としか思えない。威圧と暴力によって掃きよめられたいっわりの空間でしかないのである。この空間



一九五二・五・一「人民広場」

を、哄笑と歓呼と握手で充溢させる日は、いつやってくるであろうか。それはやってくるのではなく、私たちの力が来らしめるものにはない。その日を来らしめること、これは私にとって、血をもってつづられた過去への復讐を意味するだけではなく、現在の学問と生き方にかかわる問題なのである。

(二百数十名を「被告」とする空前の人裁判「メーデー裁判」は、このほどようやく第一審論告、求刑の段階に入った。結審にいたるまでなお十数年を要すると予想されている。「メーデー事件」はまだ終わっていない。)

(東京経済大学専任講師)

国際文学ゼミと第一回 文ゼミのことなど

島 本 昌 一

(昭和三年三月卒)

(1)

昭和三〇年、ワルシャワ大学で開かれた国

際文学ゼミナール(七月)に参加し、帰りは招待されてソビエト・中国を廻った。丁度、法政が準備校として文学部学生の研究組織をつくるべく懸命の努力をしている時であった。第一回の全日本学生文学ゼミナールは帰国後の十一月頃開かれたと思う。手元に資料がないのはつきりしない。今回想を求められたが特に心に留めていなかったので漠然としてゐる。(編集部注・第二回か。本年は第二回)国際交流もまだ盛んでなかった頃、日本文学科の学生が行くのだから何かその必然性のようなものがあるはずと思うのだがそれはつきりしないのだ。勿論、当時の国際状況や学生運動の流れなどから日文科で起ったことを説明することはやさしい。しかしそれはあくまで説明であって日文科の歴史にはならない。学生生活それ自体が歴史をもつことはむづかしいことと思う。そこで人々をこのような行動にかり立てた内的要因のときものをさぐりながら回想してみる。したがって相当地に主観的にもなることを了承されたい。

当時の法政は今では想像できないひどい状態にあった。終戦後のまにあわせの校舎のまま学生数が飛躍的に増大していたからである。名簿をみても、三〇年卒二一名に対して

私の三二年卒は八二名である。しばしばストライキが起った、当時は政治主義的であったように思われているが、身近な問題と結びついていたので広く一般をとらえ得たのである。授業にしても、もう聖なる伝統を個から個へ単伝していくなど出来るはずもなかった。教師も困ったと思う。しばしば日文科の危機が叫ばれ、さしあたって私達は出来ない出来ないと言われながら卒業した。無理もなかった、私にしても大きな希望をもって入学したとはいえない。故郷の大学で物理を学んでいたがつまらなくなって上京したにとどまる。日文科を選んだのは余りにも自国のことを知らなさすぎるという反省からだ、文学は好きでもそれを論ずるとはどんなことか分らなかったし、古典が註釈以外の対象たり得るなど夢にも思ったことがなかった。何をしていたのかさっぱり分らないので授業にも出たことは殆どなかった。研究会と称して勝手なことをしていたが、ほかの人も同じ事情であつただろう。各々創作や学生運動といった違いはあつても、とにかく授業に関係のないことをしている時だけ生甲斐を感じていたことは同じで、日文科の学生としての統一はなかったのである。ゼミとはこのような現状に